

明治期における溝口家の道具移動史補遺

——原三溪旧蔵の雪村筆龍虎図屏風と祥啓筆李白觀瀑図について——

宮 武 慶 之

論文要旨

『人文（十三号）』では、溝口家が明治三十七年に行った売立と、高橋箒庵や原三溪との個人取引を明らかにした。しかしながら三溪が所蔵した作品のうち溝口家伝来とする雪村周継筆龍虎図屏風、啓書記筆李白觀瀑図については明らかにすることができなかった。

現在、確認できる雪村筆龍虎図屏風は根津美術館、クリーヴランド美術館の所蔵品のほか『美術画報』掲載作品がある。啓書記筆李白觀瀑図は潁川美術館に所蔵されている。

文献資料から雪村筆龍虎図屏風は明治四十三年の某家の売立に出品され、中村作次郎により落札され三溪が購入していた。啓書記筆李白觀瀑図は明治三十年頃に箒庵が溝口家との直接取引により購入し、その後、三溪に売却されていた。以上の作品の近代における所有移転を検討する。

本稿では溝口家に伝来し、近代において三溪が所蔵した龍虎図屏風および李白觀瀑図を明らかにする。

キーワード【原三溪、高橋箒庵、雪村筆龍虎図屏風、祥啓筆李白觀瀑図、溝口家】

一 はじめに

新潟下越を治めた溝口家は四代藩主重雄（一六三三—一七〇八）、十代藩主直諒（一七九九—一八五八）が石州流の茶の湯を嗜んだため多くの道具を所蔵した。先の『人文（十三号）』では溝口家の歴代藩主による美術品コレクション形成とその流出について論じた^①。さらに溝口家が売立に至るまでの同家の家政状況について論じた。

溝口家の売立は明治三十七年（一九〇四）に両国の中村楼において開催された。そのとき出品された作品は高橋箒庵（一八六一—一九三七）による『近世道具移動史』（慶文堂書店、一九二九）において三件しか判明していなかった。筆者は、新出の資料である松山青柯（初代吟松庵 一八三六—一九一六）による『つれづれの友』（個人蔵）から出品された作品二十件を明らかにした。

当時の溝口家では、売立に先立ち、個人取引によっても所蔵品を売却していた。このような個人取引では箒庵と原三溪（一八六八—一九三九）が、溝口家から道具を入手していた。

箒庵旧蔵の溝口家伝来品については、箒庵が自家蔵品を売立において売却する際に作成した売立目録五件から直接取引をしたと推定される作品を明らかにした。

三溪旧蔵の溝口家伝来品については三溪自身の記録『三溪帖（草稿）』や『美術品買入覚』（いずれも三溪園保勝会蔵）から伝雪舟筆《四季山水図》（京都国立博物館蔵）、大燈国師墨蹟《物我両忘》（個人蔵）、酒井抱一筆《秋草鶉図》（山種美術館蔵。図1）、酒井抱一筆三幅対《野花螳螂、波上明月、水草蜻蛉》（畠山記念館蔵。図2）を購入していることを紹介した。これらの溝口家伝来品の譲渡は、先の『近世道具移動史』にもあるように明治三十年前後から個人取引によって売却した一例であるといえ、《四季山水図》や《物我両忘》の購入にあたっては京都の香具商の鳩居堂が仲介していた。以上がこれまでに明らかにした三溪旧蔵の溝口家伝来品である。

その後の調査から近代の日本美術研究家である田中親美（一八七五—一九七五）の娘婿で日本画家であった縣治明（一八九七—一九八二）が所蔵した文書の中に、大燈国師墨蹟の写真（個人蔵。図3）が存在していた。この写真は三溪が所蔵した大燈国師墨蹟《物我両忘》であり、三溪から親交のあった親美に譲渡されたと推測される。

『三溪帖（草稿）』は、三溪によって収集された美術品コレクション

ンを一冊の図録としてまとめ、審美書院から解説付きで出版しようとした。しかしこの草稿が製本となり三溪に納品する直前、関東大震災で審美書院の倉庫が焼失したため出版には至らなかった。画像の掲載も予定されたが、その画像も現存していない。この点から、三溪の関係者の所蔵による大燈国師墨蹟の写真が存在することは貴重である。

三溪は明治四十三年に、溝口家伝来の雪村筆龍虎図屏風と祥啓筆李白観瀑図を入手していた^②。三溪が所蔵したこれら二件の作品について触れておきたい。一件目の龍虎図屏風は展覧会図録『原三溪と美術』（二〇〇九、三溪園保勝会）において根津美術館所蔵本として紹介される。しかしながら、溝口家との関わりについては明らかにされていない^③。二件目の李白観瀑図は齋藤清『原三溪—偉大な茶人の知られざる真相—』（二〇一四、淡交社）において潁川美術館蔵品として紹介されているものの、詳しい解説がなされていない^④。また「李白観瀑図」は、箒庵が『近世道具移動史』で述べる直接取引により入手した三件の道具の一つと目される。これら二件を明らかにすることができれば、『人文（十三号）』で紹介した溝口家から個人取引によって流出した道具のうち、作品名が判明する作品すべてを明らかにすることができる。そこで二件の作品に注目して調査を行い、文献記述等から近代における移動史を検討する。

先ず雪村筆龍虎図屏風は、室町時代後期に活躍した雪村周継（一五〇四—一五八九）による龍と虎を描いた屏風である。溝口家の記

録では掛物などの蔵帳である『御掛物帳』（新発田市立図書館蔵）に所載され、同家に伝来したことが確認される。そこで雪村筆の龍虎図屏風として確認できる根津美術館本、クリーヴランド美術館本、美術画報所載本の三件に注目し伝来について検討する。

次に祥啓筆李白観瀑図は室町時代後期に活躍した賢江祥啓（生没年不詳）による李白観瀑図である。祥啓は鎌倉五山の一つである建長寺の書記をしていたため、啓書記とも呼ばれている。この掛物は『御掛物帳』にも所載され、同家に伝来した。

明治期において箒庵は明治三十五年頃に溝口家との直接取引により五十点余の道具を購入していた。『近世道具移動史』で述べられる三件の作品のうち伯庵茶碗、保元時代扇面杜若模様香合の現存は確認されるが、祥啓筆李白観瀑図だけは所在が明らかではなかった。また三溪による『三溪帖（草稿）』では溝口家伝来の祥啓筆《山水図》を明治四十三年に箒庵から譲渡されており、同書では本幅が溝口家伝来品であると紹介されている。⁶すなわち『近世道具移動史』において箒庵が直接取引により入手した祥啓筆山水図は、その後三溪が所蔵したと考えられる。そこで頤川美術館蔵が所蔵する《高士観瀑図》（館の表記に従う）に注目して調査を実施し、本作品と溝口家の関係および、近代における美術品移動について検討してみた。

本稿では『人文（十三号）』に引き続き、溝口家が個人取引によって売却した後、三溪が所蔵した二件の美術品について明らかにする。

二 雪村筆龍虎図屏風について

『三溪帖（草稿）』は矢代幸雄『三溪先生の古美術手記（その三）』に所収される。同書において、雪村筆龍虎図屏風を所有した三溪は以下のように述べている。⁷

此畫、龍虎ヲ借りテ彼ノ胸中ノ磊塊ヲ灑ギシモノニシテ、雄豪ノ氣一代ヲ驚倒セシム。猛虎吼テ老竹折ル、意氣冲天、此ヲ展ブレバ、満紙飛揚シ去ラントス。雪村得意ノ大作ト云フ可シ。此幅溝口家ノ舊藏ニシテ、後チ小川一眞氏ノ藏トナリ、大正〇年更ニ余ガ有二婦セリ。⁸

記述から、三溪の所蔵した龍虎図は、「胸中ノ磊塊ヲ灑ギ」とあることから、見た者に鮮烈な印象を与える作品であったことが伺える。また、その作品については猛虎が吼え、老竹を折る情景があり、紙面に躍動感が漲る構図であったことがわかる。この屏風は溝口家伝来品であったが、同家から流出して以後は、写真家で帝室技芸員の小川一眞（一八六〇—一九二九）が所蔵し、大正元年（一九一二）に三溪が所蔵したことが述べられる。

そこで溝口家の記録をみてみると、同家に所蔵された書画などの蔵帳である『御掛物帳』がある。同書は新発田藩家老の溝口伊織家

の所蔵文書である。記載される内容は歴代藩主による竹花入や掛物、中国絵画や近世絵画、墨蹟、茶人による書画である。同書中、「御屏風之部」には以下のような記述がある。

一 龍席 一 双 雪村筆

記述から三溪が所蔵した雪村筆龍虎図屏風もこれに該当すると考えられる。

ところで三溪の所蔵した雪村筆龍虎図屏風を根津美術館本であると指摘したのは大江孝である。大江は画家である一方で雪村研究に勤しんだ。大江はクリーヴランド美術館本が三井家伝来であり、根津美術館本が三溪の旧蔵品としている。その理由として当時は所在が不明であるが、高久田脩司から貰った雪村の画像を挙げ、これを三溪旧蔵本すなわち根津美術館本としている⁽⁸⁾。また、大江は本屏風について三溪の旧蔵品であると指摘するも、それ以前の伝来については明らかにしていない⁽⁹⁾。

当時、存在が確認できる雪村筆龍虎図としては九條家の売立目録において一件が確認できる。そのため根津美術館本、クリーヴランド美術館本、九條家売立目録掲載品の三件について近代における所有移転を検討する必要がある。そこで三作品の所有移転を論じるとともに、根津美術館蔵本については三溪の入手に注目して当時の状況について検討したい。

① 根津美術館本 (図 4)

現在、雪村筆《龍虎図屏風》は根津美術館が所蔵する。平成二十七年度夏のコレクション展「絵の音を聴く―雨と風、鳥のさえずり、人の声―」において実見したため、その所見を述べてみたい。

右隻の雲間からでてる龍は三爪で珠を握っている。左隻の虎も大きく眼を見開き、獲物を狙うように描かれるが、胴体の丸みが柔らかな印象を与える。

小さな瀧の周辺には竹が数本描かれるが風に大きくなびき、一本は逆「く」の字に曲がっている。このような竹の描き方は《竹林に猿蟹図》(大和文華館蔵)とも通じている。

この作品は明治四十三年十一月十四日に東京美術倶楽部で開催された某家の売立である『某大家書画道具類展観入札』に出品されている⁽¹⁰⁾。当日の高値表をみると中村好古堂によって三千百一円で落札されている⁽¹¹⁾。その後の所蔵者は不明であるが、昭和五十七年(一九八二)に同館で新収蔵品として公開された作品である。

② クリーヴランド美術館本 (図 5)

本作品を実見できていないため、図録から所見を述べてみたい。右隻は雲間から龍が飛出し、胴体を雲が覆っている。龍が上方を向いていく姿を描く。左隻の虎はやや痩せており、眼光はおとなしい印象を受ける。風雨が画面左上部から右下部にかけて描かれるのに対して、山谷から直下する滝の流れが虎の存在感を高めている。

この作品が所載される文献では『国華（第七三七号）』がある。⁽¹²⁾ 本書の発刊は昭和二十八年で、当時の所有者は京都の美術商であった里見忠三郎である。⁽¹³⁾

本作品は東京帝室博物館による『稿本日本帝国美術略史』（隆文館、一九一二）における雪村作品のうち「龍虎図屏風 男爵三井八郎衛門蔵」として紹介され図版も掲載される。本書の発刊が明治四十五年であることから里見家以前の所有者は三井家十代当主、三井八郎衛門（高棟 一八五七—一九四八）であったことがわかる。里見家に渡った後の所蔵者は確認できないが、⁽¹⁴⁾ 現在はクリーヴランド美術館に所蔵される。⁽¹⁵⁾

③美術画報所載本（図6）

『美術画報（第三十一巻三号）』（画報社、一九一二）には「龍虎図屏風一雙 九條道實君蔵」として所載される。所蔵者は貴族院議員であった公爵九條道實（一八七〇—一九三三）である。この屏風については、実見できていないため、図版を参考に所見を述べてみたい。

右隻の龍は画面中央からやや右側に描かれ、岸壁とその流水が織りなす波濤から出てくる情景が描かれる。情景に比較して龍の顔部はやや小さい。左隻の虎は画面左側の瀧、右側の波濤の間にいるものの、おとなしい印象を受ける。

本作品が所載される『美術画報（第三十一巻三号）』の発刊は明

治四十五年（一九一二）であり、当時の所蔵者は九條道實である。その後、九條家では大正十一年七月十日に、東京美術倶楽部で売立を行っている。そのときの売立目録が『公爵九條家御什器入札』である。売立目録にも本作品は所載されるが、⁽¹⁶⁾ 同売立以後の所蔵は確認できていない。

以上が現在、確認できる三件の雪村筆龍虎図屏風の概要と来歴である。三溪自身の入手について『三溪帖（草稿）』には大正元年とされる。このほかの三溪による美術品購入の記録では『美術品買入覚』がある。同書は三溪が購入した美術品の購入控えである。同書には購入金額、持ち込んだ美術商の屋号や氏名が記載される。そのうち明治四十三年の項目において日付がないものの、以下のような記述がある。

一金 三千百五十円 中村 雪村龍虎図屏風

記述にある中村とは、東京において美術商を営んだ中村作次郎（一八五八—一九三一）のことである。記述から雪村筆の龍虎図屏風は明治四十三年に中村好古堂より三一五〇円で入手していることがわかる。

この入手した時期を考えると、根津美術館本は明治四十三年十一月十四日の売立に出品され、中村好古堂によって三千百十一円で落札されている。三溪は中村好古堂から雪村龍虎図屏風を購入し

ており、その時期は売立直後の同年十月四日から十二月にかけてと考えられる。また購入価格も好古堂が落札した価格に三十五円という手数料を加えた程度のものであったことから、売立に際して三溪が中村に指示して注文し、購入した作品であると考えられる⁽¹⁷⁾。

また先に紹介したクリーヴランド美術館本および美術画報所載本の明治四十五年時点における所蔵者は、それぞれ三井八郎衛門、九條道實である。このことから根津美術館本が三溪の旧蔵品と考えられる。

以上の点から、三溪が入手した雪村筆龍虎図屏風とは根津美術館本であると判断することができる。従って屏風の伝来は溝口家が所蔵したのは小川一真、原三溪などを経て、昭和五十七年に根津美術館が所蔵する経緯をみることができる。

三 祥啓筆李白観瀑図について

現在、颯川美術館蔵が所蔵する祥啓筆《高士観瀑図》(図7)は、同館創設者の颯川徳助(一八九九—一九七六)により収集された作品である。

同館の協力のもと、作品を実見することができた。作品の所見を述べてみると杖を持った高士が小人を従え瀑布を眺める構図である。画面左側には高くそびえる老松を描き、高士が欄干のある崖から瀧を眺めている。画面の構成をみると高士と小人の輪郭線は

薄墨で描かれ、首袖部分と裾、袂部分のみ濃い墨が用いられ、小さい空間の中で人物をより際立たせている。

水流の動きも細かく描き、崖に自生する草を細かく点描している。本紙の中部には山肌を少し描き、上部に余白を大きく取ること、雄大な山の風景を描いている。印は「祥啓」の方印が本紙左下部に押されている。

表装をみると一文字と風帯は白地宝尽金欄、中廻は緑地菊金欄、上下は菊紋緞子、軸先撥は象牙である⁽¹⁸⁾。

本幅を収納する桐箱の甲部(図8)には墨書で以下のような記述がある。

李白 啓書記筆

記述から啓書記すなわち祥啓による李白の図であることがわかる。この筆跡は神尾備前守元勝(一五八九—一六六七)とされる。また本幅には狩野常信(一六三六—一七一三)による極状(図9)一通が付属しており、以下のような記述がある。

李白之画致

一覽候啓書記

正筆而候 以上

狩野法眼

戊

十月七日 常信（花押）

記述から常信は本幅を李白観瀑図としていたことがわかる。これは李白による望廬山観布瀑の詩二首のうち第二の詩、すなわち

日照香炉生紫煙

遙看瀑布挂前川

飛流直下三千尺

疑是銀河落九天

に因んだものである。

本幅を収納する箱側面には「碧雲山房蓄藏物品」の印を捺した貼紙（図10）がある。この貼紙は新発田藩主溝口家の伝来品を示すもので、同家の伝来品に多くみられる。⁽¹⁹⁾そこで溝口家の掛物などの蔵帳である『御掛物帳』中、「夏之部」をみてみると以下のような記述がある。

一 季白⁽¹⁸⁾ 箱書神尾備前守 啓書記筆

記述から祥啓が李白を描き、箱書は箱書神尾備前守であることから、⁽²⁰⁾ 額川美術館蔵品と合致する。

なお、『美術画報（四編卷二）』には前田健次郎所蔵の祥啓筆李白観瀑図が掲載されるが、額川美術館本が溝口家の伝来品であるため、本稿では取り扱わない。⁽²¹⁾

『人文（十三号）』では、明治期における溝口家の伝来品売却に注目した。『高士観瀑図』も溝口家に伝来したが、明治期に流出したものと考えられる。そこで近代における所有移転に着目したい。

三溪による『三溪帖（草稿）』中、「山水 啓書記筆」の項には以下のような述がある。⁽²²⁾

銀河九天ヨリ落チ、山雲低迷、詩星吟杖ニ倚ルノ状。布局整明、筆墨靈活、啓書記遺作中ノ一傑作タリ。啓書記ハ山水ニ於ケル非凡ノ名手ニシテ、會マ道釋人物アリト雖、人物ハ遂ニ彼ノ長技ニ非ラズ。明秀清遠ノ氣ヲ烟霞ノ間ニ寓スルハ、彼ノ宿縁タリ。此幅溝口家ノ舊蔵ニシテ箒庵氏ノ有ニ帰シ、明治〇〇年更ニ余ノ有ニ属セリ。

記述によれば、三溪の所蔵した祥啓筆の山水図を遺作中の一傑作として激賞している。三溪は本図のことを「銀河九天ヨリ落チ」としているが、これは先に紹介した李白による「望廬山観布瀑」に因んだ賛文である。また三溪自身の考えでは祥啓は非凡の名手で、道釋画の人物は彼の得意な画題ではないものの、「明秀清遠」の氣韻を醸し出すのは、同人の非凡な画境をみせるものと評している。三

溪の所蔵した祥啓筆の山水図は溝口家の伝来品であったことがわかる。かつて本幅は箒庵が所蔵していたが、明治年間に三溪が所有していた。

ところで溝口家伝来の《李白観瀑図》については箒庵による『近世道具移動史』に記述がみられた。同書中「溝口伯家蔵品」の項では以下のような記述がある。⁽²³⁾

溝口家は越後新発田藩主で、文政頃号を翠濤と云はれた好事の主人あり、彼の観阿白酔庵を寵遇し茶事に執心にして盛んに名器を買収せられたので、各般の什器が潤沢であつたが明治三十年前後より個人取引で他に譲られた点数も少からず、三十五年頃余も亦同家の道具五十余点を一手に譲り受けた事あり、其中には伯庵茶碗、保元時代扇面杜若模様香合、啓書記筆李白観瀑等の名品を含蓄して居た、併し同家の蔵器は中々多数で、右の如く度々個人売却を行はれた後にも尚夥しき名器あり

記述から、新発田藩十代藩主、直諒（号翠濤）が収集した道具などは溝口家に存在した。これらの道具は明治三十年前後から個人取引により売却された。特に明治三十五年頃には筆者の箒庵自身も書画および茶器等五十数点を購入したようである。同書中で述べられる作品名が記載される作品は「伯庵茶碗」すなわち伯庵茶碗銘《宗節》（泉屋博古館分館蔵。図11）、⁽²⁴⁾「保元時代扇面杜若模様香合」す

なわち《扇面時絵香合》（根津美術館蔵。図12）⁽²⁵⁾、「啓書記筆李白観瀑」の三件であった。

これまでのところ溝口家に伝来した「啓書記筆李白観瀑」が、どの作品に該当するのかを明らかにすることはできなかった。潁川美術館の所蔵品調査から同館が所蔵する祥啓筆《高士観瀑図》が箒庵旧蔵品として該当する。このことから『三溪帖（草稿）』で述べられる山水図とは、溝口家伝来品である点および箒庵から三溪に譲渡されている点で現在、潁川美術館蔵が所蔵する祥啓筆《高士観瀑図》と同定できる。

溝口家が所蔵した祥啓筆李白観瀑図は明治三十六年に京都で開催された古美術展覧会において書画席で出品されている。⁽²⁶⁾その後、溝口家は箒庵との直接取引により譲渡し、箒庵からさらに三溪に譲渡していたことがわかる。

以上の点から、本幅の伝来は新発田藩主溝口家に伝来し、明治三十五年以降に箒庵が所蔵し、明治四十三年に三溪が入手していたことが判明する。戦後では潁川徳助が所蔵し、現在では潁川美術館で所蔵される経緯をみるができる。

四 むすび

『人文（十三号）』では三溪の所蔵品中、溝口家伝来品は伝雪舟筆《四季山水図》（京都国立博物館蔵）、大燈国師墨蹟《物我両忘》（個

人蔵)、酒井抱一筆《秋草鶉図》(山種美術館蔵)、酒井抱一筆三幅対《野花螳螂、波上明月、水草蜻蛉》(畠山記念館蔵)があると紹介した。今回の調査により新たに、雪村周継筆《龍虎図屏風》(根津美術館蔵)、祥啓筆《高士観瀑図》(穎川美術館蔵)も三溪が所蔵した溝口家伝来品であることが判明した。

雪村筆とする龍虎図屏風は根津美術館本、クリーヴランド美術館本、美術画報所載本の三件が知られていた。三溪が中村作次郎から入手した時期、購入価格および三件の屏風の伝来から根津美術館本が該当すると結論付けた。

穎川美術館所蔵の祥啓筆《高士観瀑図》の調査から収納する箱側面には「碧雲山房蓄藏物品」の印を捺した貼紙があり、同家の蔵帳である『御掛物帳』にも所載されることから、同家の伝来品であることが判明した。本幅は明治三十年前後、溝口家と箒庵との直接取引により売却され流出した作品であり、その後、三溪に譲渡されたことが判明した。『近世道具移動史』では箒庵が直接取引をした作品中三件が記載される。これまでのところ「啓書記筆李白観瀑」については明らかにできていなかったが、穎川美術館所蔵本が該当すると判明した。

以上から高橋箒庵が『近世道具移動史』で紹介する直接取引により入手した作品のうち作品名を明記する三件の作品と、原三溪が所蔵した所蔵品中、『三溪帖(草稿)』で紹介される溝口家伝来品を全て明らかにすることができた。このことによって『人文(十三号)』

で紹介した箒庵、三溪との個人取引によって溝口家から流出した作品を明らかにすることができた。

謝辞

本稿執筆にあたり調査にご協力いただきました根津美術館、穎川美術館、『雲中庵茶会記』のご教示をいただきました野村美術館長谷見氏、原三溪の旧蔵品についてご教示をいただきました齋藤清氏、画像提供にご協力いただきました泉屋博古館分館、山種美術館、東京文化財研究所、要旨の英訳にあたりご教示を頂きました同志社大学グローバル・コミュニケーション学部准教授中村艶子氏に深謝申し上げます。

付記

売立目録の調査は以下の研究助成による。

宮武慶之、財津永次「売立目録所載の墨蹟データベースの構築と筆跡の検討」(平成二十四年度出光文化福祉財団研究助成)

画像の典拠

- | | |
|---------------|------------|
| 図1、図7、図10 | 撮影筆者 |
| 図2、図4、図11、図12 | 所蔵館による画像提供 |
| 図3 | 『與衆愛玩』 |
| 図5 | 『国華』 |
| 図6 | 『美術画報』 |

註

- (1) 宮武慶之「明治期における溝口家の道具移動史」『人文(十三号)』

- 学習院大学人文科学研究所、二〇一五、二三三―二五二頁。
- (2) 齋藤清『三溪―偉大な茶人の知られざる真相』淡交社、二〇一四、一〇一―一〇二頁。
- (3) 三溪園保勝会編『三溪と美術』三溪園保勝会、二〇〇九、図版七。
- (4) 前掲註(2)。三五四―三五五頁。
- (5) 宮武慶之「溝口家旧蔵の茶道具拾遺」文化情報学(第十一卷第一号)、同志社大学文化情報学会、二〇一五、四五―六二頁。
- (6) 矢代幸雄「三溪先生の古美術手記(その三)」『大和文華(十九号)』一九五七、大和文華館、三二―三三頁。
- (7) 前掲註(6)。三六頁。
- (8) 三春町歴史民俗資料館編『雪村 三春への道』三春町歴史民俗資料館、一九八三、二二―二四頁。
- (9) 大江孝『雪村―三春・会津―』(カネサン書店、一九八三、六二―六六頁)によれば、この屏風の存在が確認できたのは、昭和五十七年根津美術館における展覧会であつたとされる。それまで大江は画像のみ、この屏風を確認していたが、所在不明の雪村による名作としていた。また、同書によれば田中一松はこの屏風を『国華』に紹介する予定であつたそうであるが、実現しなかつたとある。
- (10) 売立目録『某大家書画道具類展観入札』東京文化財研究所蔵、請求記号美研―0137。
- (11) 東京美術倶楽部百年史編纂委員会編『美術商の百年 東京美術倶楽部百年史』、東京美術倶楽部、二〇〇六年、二三六―三三七頁。
- (12) 『国華(七三七号)』、国華社、一九五三。
- (13) 里見忠三郎が所蔵した美術品を『国華』でみてみると以下の作品がある。
七四二号 草花図 里見忠三郎氏蔵
- 七三八号 浜松図屏風 里見忠三郎氏蔵
- 七三七号 雪村筆竜虎図 里見忠三郎氏蔵
- 七三五号 渡辺了慶筆山水図双幅 里見忠三郎氏蔵
- 七二一号 伝宗達筆扇面画 里見忠三郎氏蔵
- 六九四号 冷泉為恭筆敏行朝臣・賀茂祭歌意图 里見忠三郎氏蔵
- (14) 東京帝室博物館編『稿本日本帝国美術略史』、隆文館、一九一二、一四九頁。
- (15) 蕪山順吉編『欧米蒐蔵日本美術図録』(蕪山竜泉堂、一九六六、一四四―一四五頁)にはクリーヴランド蔵品として雪村筆龍虎図屏風六曲一双が掲載されている。
- (16) 同目録には
一〇九 雪村 龍虎六枚折屏風 一双
とある。
- (17) 野村美術館館長谷晃氏の教示によれば仰木政育による『雲中庵茶会記(戦前・戦中編)』(味岡敏雄、一九九七)に昭和十九年(一九四四)三月二四日、中村好古堂の茶会において溝口家・大徳寺大仙院伝来、三溪旧蔵の大燈墨蹟を使用した記述があるとのことである。中村作次郎は三溪在世当時に美術品を納入した。だが三溪没後は原家から大燈国師墨蹟を購入し、茶会で使用したものと考えられる。三溪と中村作次郎を巡っては美術品の納入のほか、三溪没後の原家から道具を購入していた形跡が伺われる。
- (18) 中廻は上部がやや小振りな菊の金欄であるのに対して、下部の方はやや大きい金欄である。本紙上部に余白が多いため、このような金欄の大小を用いたのであろう。
- (19) 宮武慶之「新発田御道具帳にみる溝口家旧蔵の茶道具」『文化情報学(第十卷第二号)』、同志社大学文化情報学会、二〇一四、五九―一

一二頁。

(20) ただし、何時の時点で溝口家の所蔵品となったかは不明である。

(21) 『美術画報(四編巻二)』、画報社、一八九七、東京文化財研究所蔵。

(22) 前掲註(6)。三二—三三頁。

(23) 高橋義雄『近世道具移動史』慶文堂、一九二九年、一四八—一五〇頁。

(24) 前掲註(19)。一〇八頁。

(25) 前掲註(5)。五二頁。

(26) 前掲註(1)。このとき同家の出品作品中、三溪が京都の香具商、鳩居堂を介して購入したのが、雪舟筆《四季山水図》(京都国立博物館蔵)、大燈国師墨蹟《物我画忘》(個人蔵)である。

ENGLISH SUMMARY

Addendum to an investigation of the tracks of Mizoguchi

Collection in the Meiji Period: Hara Sankei's old possessions,

"Dragon and Tiger" figure screen drawn by Sesson and

"Li-Po Contemplating a Waterfall" painted by Shokei.

MIYATAKE Yoshiyuki

In *jinbun* (No.13), I revealed the auctions conducted by the Mizoguchi family in 1904 and individual transactions with Takahashi-Soan and Hara-Sankei. However, I did not clarify the Dragon and Tiger figure screen drawn by Sesshu and Li-Po Contemplating a Waterfall drawn by Shokei, the Mizoguchi family's legacy among the Sankei's possessions.

Currently, Sesson's Dragon and Tiger figure screen can be confirmed in a collection of Nezu Institute of Fine Arts and Cleveland

Museum of Art, and it also appeared in *Buyutsu-Gahou*. Li-Po Contemplating a Waterfall drawn by Shokei is in the possession of Egawa museum.

From the literature, it has been clear that the Sesson figure screen was exhibited in the auction of 1910, made a bid for by Nakamura-Sakujiro, and purchased by Sankei. Li-Po Contemplating a Waterfall was purchased by Soan through the direct dealing with the Mizoguchi family around 1897, and then sold to Sankei.

In this paper, I examine the ownership transfers of these works in the modern period, and reveal the Dragon and Tiger figure screen and Li-Po Contemplating a Waterfall that Sankei possessed in the era.

Key Words: Hara Sankei, Takahashi Soan, Facsimiles of Shukei. Sesson, Dragon and Tiger. Pair of six-fold screens, Shokei. Li-Po Contemplating a Waterfall, The Mizoguchi family

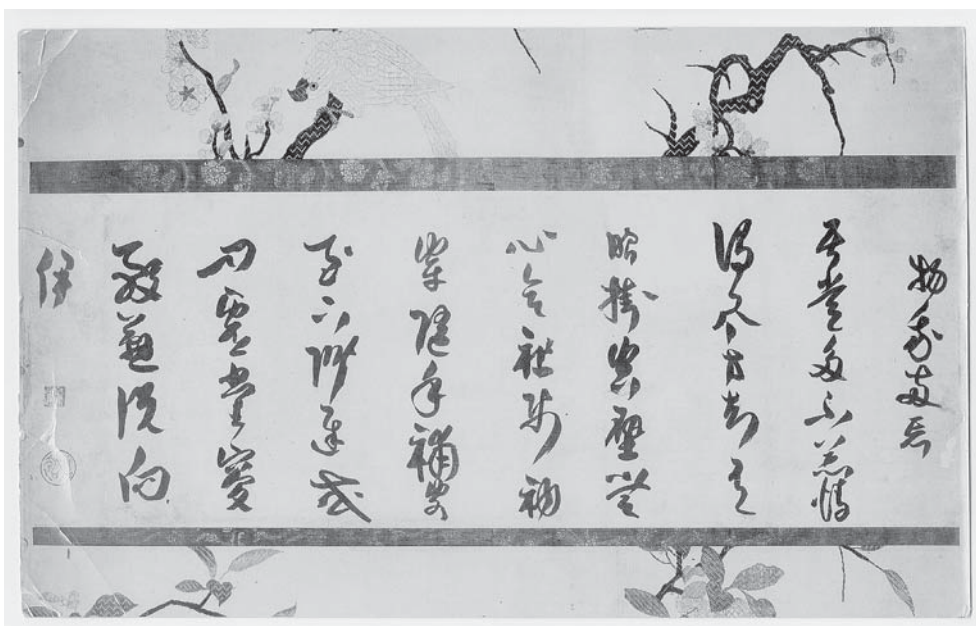


图 1 大燈国師墨蹟写真 (個人蔵)



图 2 酒井抱一筆《秋草鶉図》【重要美術品】(山種美術館蔵)



図3 酒井抱一筆三幅対《野花螳螂、波上明月、水草蜻蛉》(畠山記念館蔵)

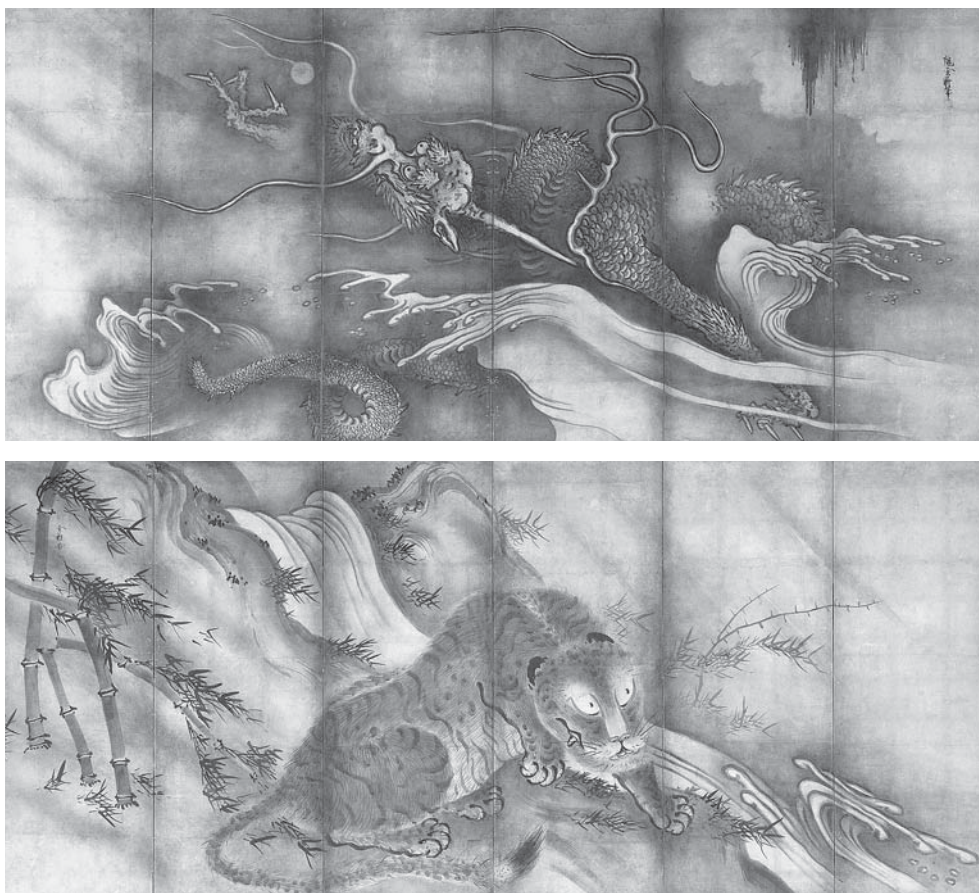


图4 雪村周繼筆《龍虎図屏風》六曲一双（根津美術館蔵）

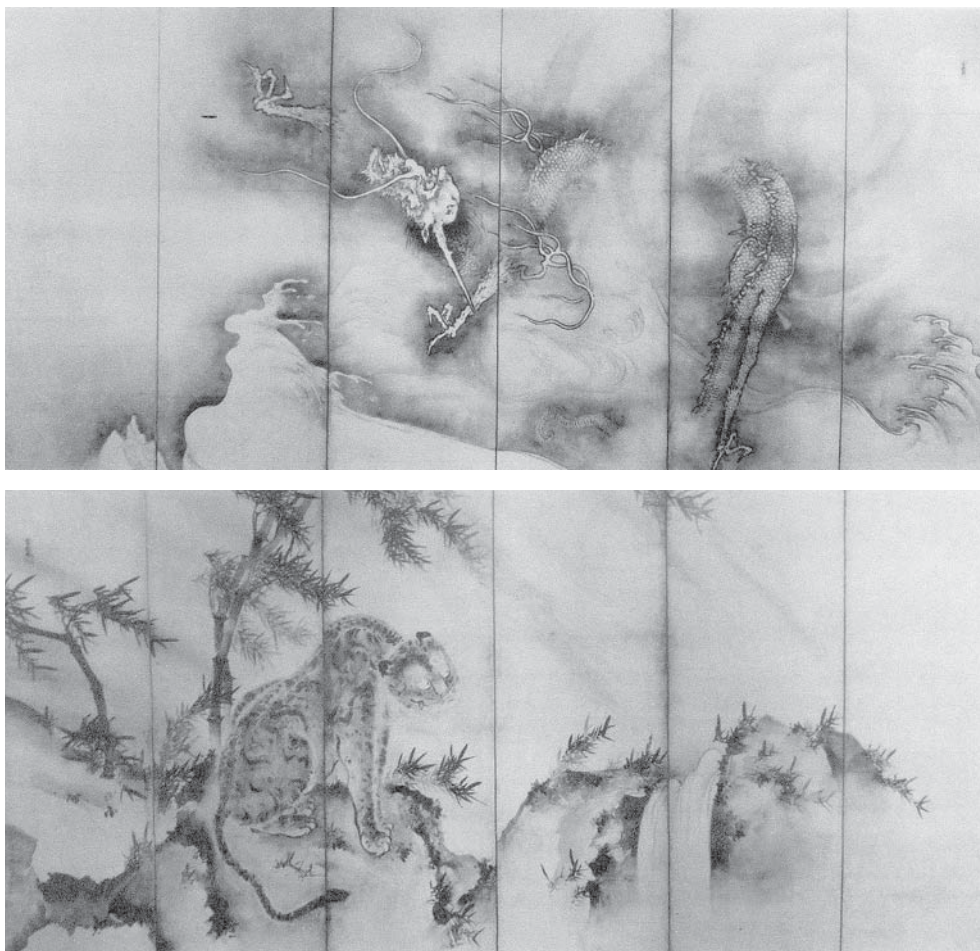


図5 雪村周継筆《龍虎図屏風》六曲一双（クリーヴランド美術館蔵）

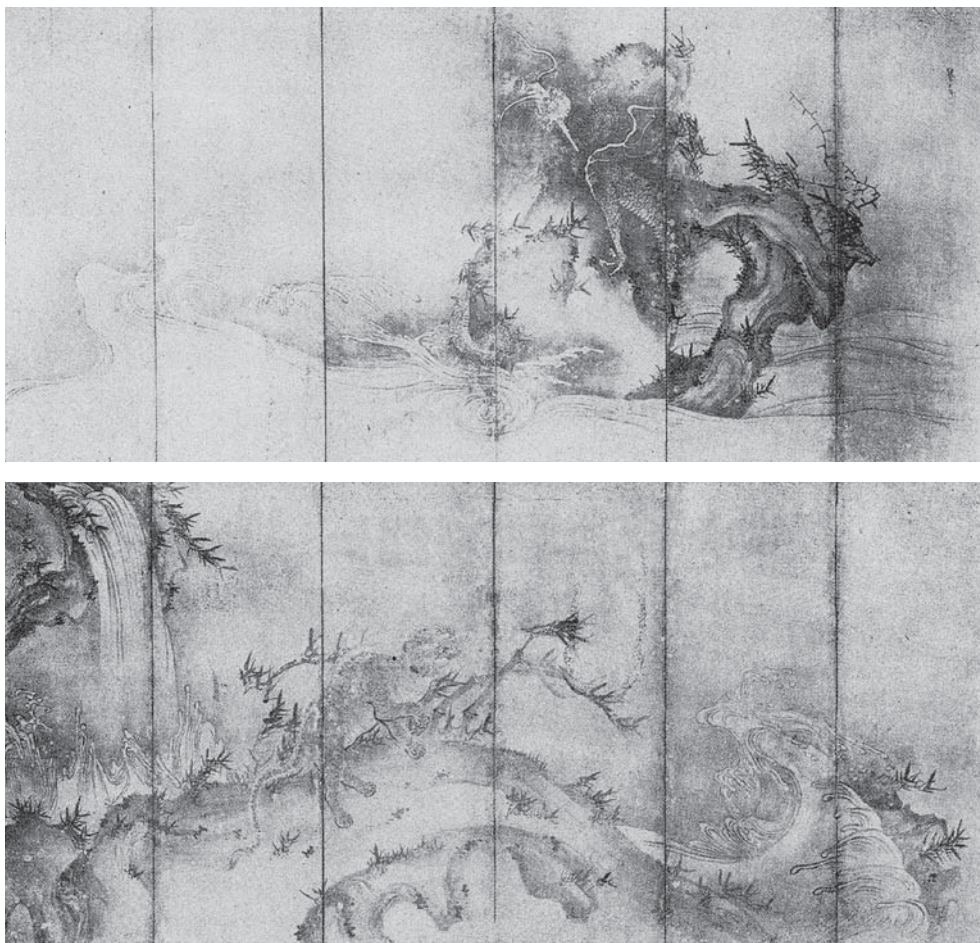


図 6 雪村周継筆《龍虎図屏風》六曲一双



図7 祥啓筆《高士観瀑図》(潁川美術館蔵)



図 8 箱甲墨書および拡大部分

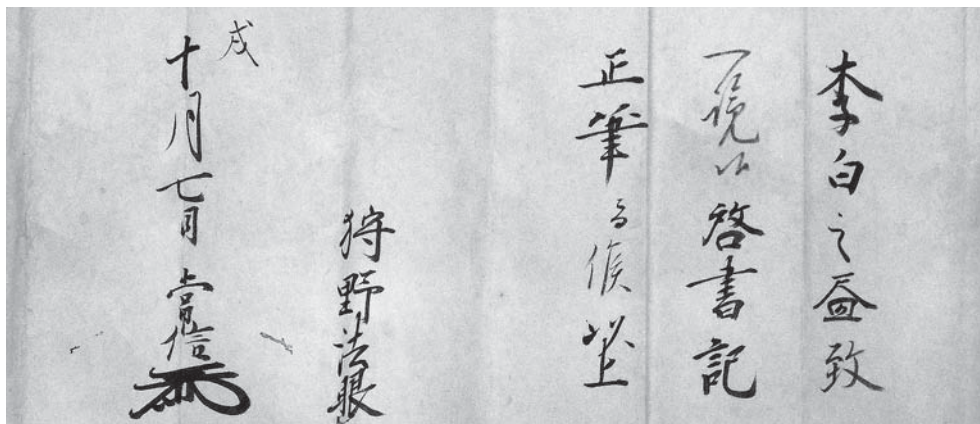


図9 狩野常信極状



図10 「碧雲山房蓄藏物品」の印が捺された貼紙



图11 伯庵茶碗銘《宗節》(泉屋博古館分館蔵)



图12 《扇面蒔絵香合》(根津美術館蔵)